



俵津製糸工場創業記念碑 碑文

(大正14年10月建立)



それ生糸は吾国産物の第一位なり。輸出に於て亦一位にして、斯業の国家に裨益すると
ころ甚大なり。中村重太郎氏、夙に此れを視る所有り。大正4年2月、2・3の有志と
結託して製糸業を起こさんと欲し、釜一百（100）器械万端を据え、同年6月に殆ど整頓
す。

新繭購買期に際し、股肱と頼む2・3の有志者豹変し、約束に齟齬して省りみず、是氏
の致命の如く困厄を来たす基因なり。今それを追想するに、事実に於て此事業を為すに多
大の資金を要す。容易に企図し得べからざるものなり。殊に吾が俵津は僻限の寒村にして
すでに資力乏し。これがため会社を組織せんとする村民未だ乏し。（氏は）会社の志すで
に止むを得ず、独力にても業を起すものなり。当時氏の苦心惨憺は、今なお思うに余りあ
り。東奔西走日夜寝食を忘れて撓まず、百折志を以て子子として努力す。如何んせん未だ
機来たらざるか。微にして露われず、或は以て時勢の然らしむる所歟、発達意の如く行か
ず、是所謂塞翁が馬にして、世の中の事凡そ隔靴搔痒の如し。

同年8月、新繭購買時に際し進退極まり、独力にて継持の難きを悟り、菅徳三郎氏・高
岡岩太郎氏其の他3人の有志に諮る。始め合資会社として菅徳三郎氏社長たり。此人資産
家にして名望高く公德厚くして、玉の如き精神の持主なり。而うして役員挙げて社勢に忠
実、ここに社勢能く動き、此故に社運漸く進む。大正9年欧州戦乱の余波の為か、生糸
俄然暴騰して幾評の利益を得、此時に臨み一百釜を増し二百釜と為し合資を株式に改む。

其後陸續として、ここに盛大の域に進む。是畢竟此社長有りて、以て此役員有る所な
り。蓋し隆盛に趨かざるの如きは何ぞ。去る12年関東大震災に際し、莫大なる損害を蒙
る。今や九牛の一毛、而して其の存在は真に賀すべきなり。是会社のみならず、村内の為
否国家の為、大いに賀すべきなり。苟も此会社有るため、村内の少女の所得其日々の工賃
を積んで家庭経済を補い、以て一家円満なるは、是会社の恩沢なり。

況んや此会社今日有るは、中村重太郎氏に依る創業の苦力と、菅氏の有力に与るなり。
村内の者深徳をここに造沢すと雖も、顛沛の間罕を記して忘却すべからざるものなり。

大正14年10月

『東西軒撰』

幹旋者 山下 長四郎

撰者 池田 仁三郎

【語句の意味】

斯業（しぎょう）	：この事業。この分野の事業。
裨益（ひえき）	：助けとなり、役立つこと。
夙に（つとに）	：ずっと以前から。早くから。
股肱（ここう）	：主君の手足となって働く、最も頼りになる家来や部下。
齟齬（そご）	：物事がうまくかみ合わないこと。食い違うこと。
困厄（こんやく）	：苦しむこと。困難。難儀。
殊に（ことに）	：なお。その上。加えて。
僻限（へきげん）	：中央から離れている場所。
撓まず（たわまず）	：心をくじけさせない。
百折（ひゃくせつ）	：何回失敗しても
子子と（けつけつと）	：一人抜きん出たさま。
塞翁（さいおう）の馬	：人生の禍福は転々として予測できないことのたとえ。
隔靴搔痒（かつかそうよう）	：物事が思うようにならず、じれったいさま。
畢竟（ひっきょう）	：結局。つまるところ。
蓋し（けだし）	：おおよそ。大略。今回は「ところが」の意も含む。
趨く（おもむく）	：ある方向におもむくこと。
九牛の一毛 （きゅうぎゅうのいちもう）	：多数の中のごく一部分。とるに足りないこと。
苟も（いやしくも）	：仮にも。
顛沛（てんぱい）	：つかの間。
間罕（かんろう）	：しっかりした期間（繁栄の期間）